

兵庫津鳥瞰図 1868（仮称）への取組みを通じた江戸時代末期の兵庫津に関する調査

青山大介

●はじめに

神戸開港 150 年を迎える前年は、そのイベントへの準備に明け暮れる一年でした。私の代表作である“みなと神戸バースアイマップ”の改訂作業で、「みなと神戸バースアイマップ 2017」の制作と、初めて過去に遡った作品「みなと神戸バースアイマップ 1868」に取り組みました。

「同 1868」は、1868 年（慶応 4 年）1 月 1 日（旧暦慶応 3 年 12 月 7 日）の正午という時間設定で、神戸市中央区南部を描いた作品です。

神戸港に浮かぶ英米仏の軍艦 18 隻のうち、英国艦の 2 隻（旗艦ロドニー、オーシャン）を描き、ロドニーは神戸開港を祝う祝砲を放つ瞬間にしています。

まちの方へ目を向けてみると、外国人居留地は造成工事が進み、西国街道では人々が往来する姿がありました。街道沿いに点在する町家以外にも田畑が広がる光景を再現しています。

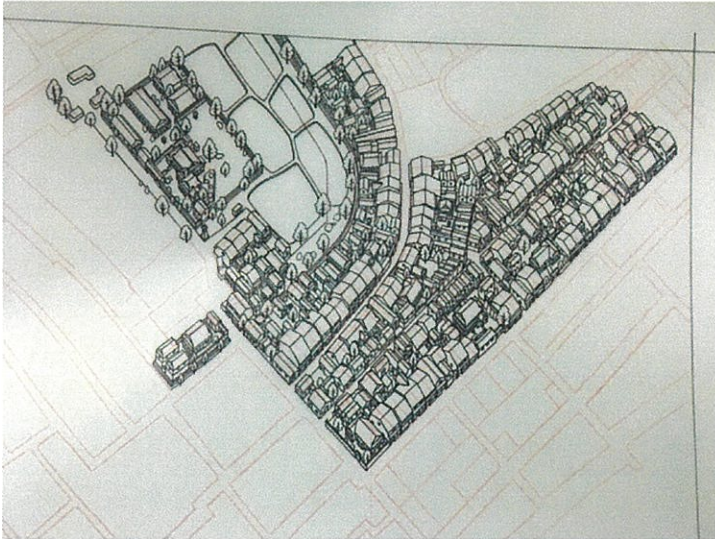


みなと神戸バースアイマップ 1868

この年にもう一つ、鳥瞰図作品の制作にチャレンジをし、そして断念をした作品がありました。「兵庫津鳥瞰図 1868 (仮称)」です。

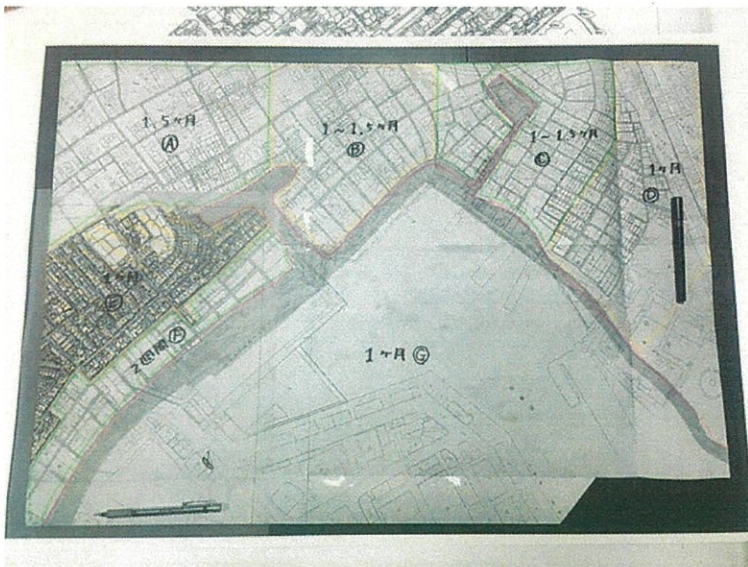
なぜ、兵庫津を描こうとしたのか。大きな理由としては、神戸開港は兵庫開港だったこと、神戸港が開港して発展成長をしていく前に、兵庫津の繁栄を改めて見つめ直してみたい、賑わう兵庫津を鳥瞰図作品として再現してみたいと、強く思ったことからでした。

神戸市文書館で「岡方文書・沽券地絵図」をベースに幕末期の兵庫津の地形を想像して組み立てていきました。



兵庫津鳥瞰図 1868 (仮称) 部分

「みなと神戸バースアイマップ 1868」では、田畑の占める割合が多かったために、制作期間を短縮することができたのですが、町家が全面的に広がる兵庫津を描く際には、どの程度の時間を要するのか不明だったこともあり、描画作業を進めることで今後の制作期間を想定することとしました。



描画作業を1ヶ月間で描くことが出来た範囲から、全体の完成までには約9～10ヶ月の期間を要することが判明。神戸開港150年の2017年中に完成させることが極めて困難なことから制作を断念することになった経緯があります。

●江戸時代における兵庫津の繁栄

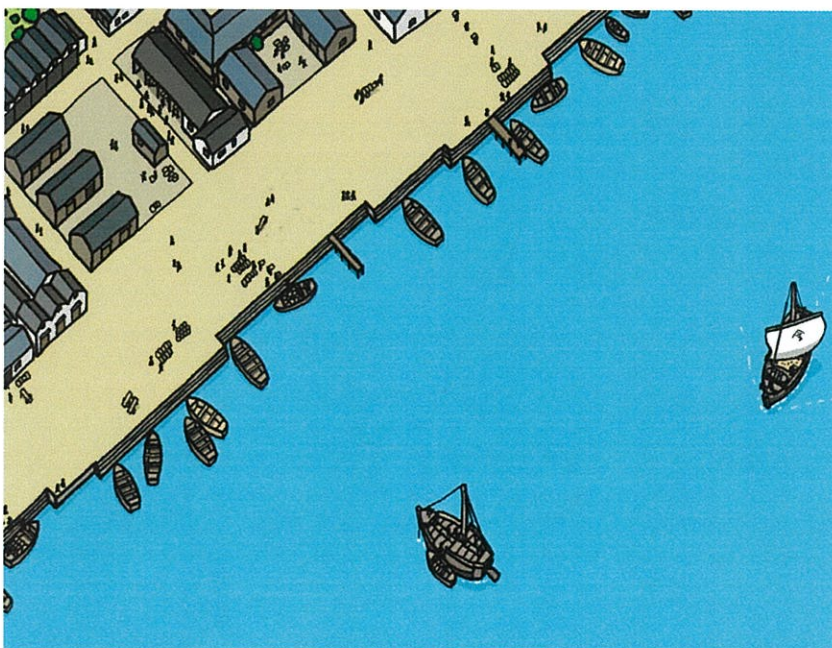
江戸時代、兵庫津は人口 2 万人の港湾都市として繁栄をしていました。西回り航路では上方の大坂を起点に瀬戸内海、日本海を経て東北、北海道の産物や上方の文化が伝わって行きました。

兵庫津鳥瞰図 1868（仮称）の中では賑わう兵庫津の姿を表現しています。その中の一部を紹介いたします。



描画範囲内に実在していた市場の様子。左から間物市場、魚市場、米市場。

多数の人が集まり競りが行われている様子表現しています。米市場は隣接している水路で、伝馬船で物資を運べるように雁木を設けた絵になっています。



北浜地区の湊の様子。雁木が施された海岸線にはそれぞれ小型の和船。沖止めの中型の弁財船が停泊して、そして伝馬船で荷役をしている様子。岸では荷車で蔵に荷物を運ぶ人々などがあります。

絵の世界の日時が真冬の 2 月 4 日ということで、北前船は運行せず沖止めの姿で表現し

ました。



和船を建造する造船所の様子。当時最大級の千石船サイズの弁財船を建造しています。船首の水押し、船尾の戸立、船底のかわら、船梁を配して根棚、中棚、上棚と和船の建造する工程に則った絵にしています。兵庫津のまちなかでは、こういった光景が日常的に繰り広げられていたことは、想像に難くありません。



酒蔵。鳥瞰図の中には6軒の酒蔵と、1軒の醤油蔵を描いています。酒蔵は通りに面した建物の軒下に杉玉を吊るしています。作者の特権としてそれぞれの酒蔵には名前をつけていて、一部を紹介すると「湊魁酒造」「嘉兵衛桜酒造」「松前北の海酒造」などの地域や航路の結び付きをイメージした名称をつけています。



芝居小屋。鳥瞰図の中には4軒の芝居小屋を描きました。それぞれ「甲楽座」「豊神館」「湊栄座」「兵神座」と命名しています。



賑わう大仏前商店街（現・古湊線）。たくさんの人が行き交う様子。幕末期には存在していなかったと思われるチンドン屋が歩く姿、それを追いかける子どもたちの様子などを表現しました。

●神戸事件と兵庫津

1868年（旧暦慶応4年1月11日）2月4日、三宮神社辺りの西国街道で日置帯刀率いる岡山藩隊約340名が明治新政府の命令で西宮へ向けて行軍中に、隊列を横切ったフランス人水兵と紛争が起き銃撃戦に発展する。神戸港沖合に停泊中だった英米仏の軍艦から陸戦隊が上陸し、一時神戸は占領状態となった事件が起きます。

日置帯刀率いる岡山藩の隊列は、事件の起こる前、1月28日に岡山を出発し、西国街道を東進しながら2月3日、明石市の大蔵谷の宿場で一泊しています。目的地の西宮までは大蔵谷宿から歩いて残り一日の距離。

翌4日朝、宿場を出発して西国街道を引き続き東進します。行程のちょうど中間地点にあたる兵庫津では、南浜地区にある浜本陣・網屋新九郎邸が岡山藩と懇意にしていたことから、この浜本陣を中心にして一軒では全隊員を収容できないことから、近隣の浜本陣に分散して昼食休憩をとったものと想像しています。

食後、再度西宮へ向けて西国街道を行軍し始めた後に、三宮神社辺りで神戸事件に遭遇することとなりました。

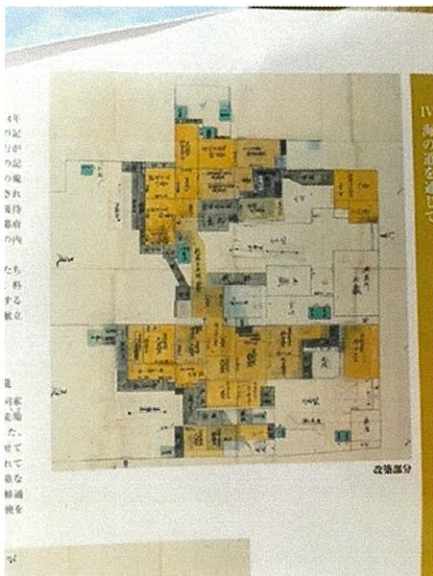
※2022年2月4日に大蔵谷から三宮神社まで実際に歩いてみたところ、真冬とはいえ穏やかな天気の下では快適に行軍することができました。

鳥瞰図の中では、岡山藩の隊列がちょうど浜本陣・網屋新九郎邸に先頭部隊が到着した様子にしており、屋敷の主人がお辞儀をして迎えているという絵にしてみました。



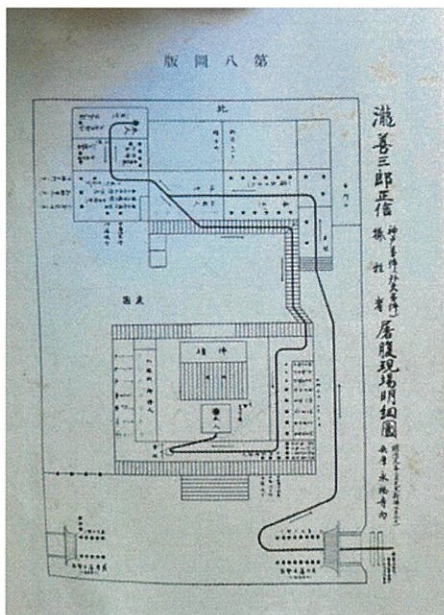
2軒の浜本陣。左下側・絵屋右近右衛門邸 右上側・網屋新九郎邸。隊列の先頭が到着している様子です。

上記2軒の浜本陣の再現には、神戸市立博物館の図録「特別展よみがえる兵庫津・港湾都市の命脈をたどる」の中に平面図が掲載されています。この平面図を元に屋敷を組み立てました。



上図の赤丸印の中には、約 340 名の岡山藩隊列を描いています。

内訳として 鉄砲隊 20 名×3 隊、士隊 40 名、大砲方 30 名、徒組 80 名、旗鼓旗本 20 名、日置帯刀側近隊・日置帯刀 30 名、後詰め 20 名、輜重隊 (しちょう) 30 名、隊卒 30 名以上。



上 2 点は「明治維新・神戸事件」 1938 年 (昭和 13 年) 発行の永福寺本堂の写真や境内のレイアウトの様子です。

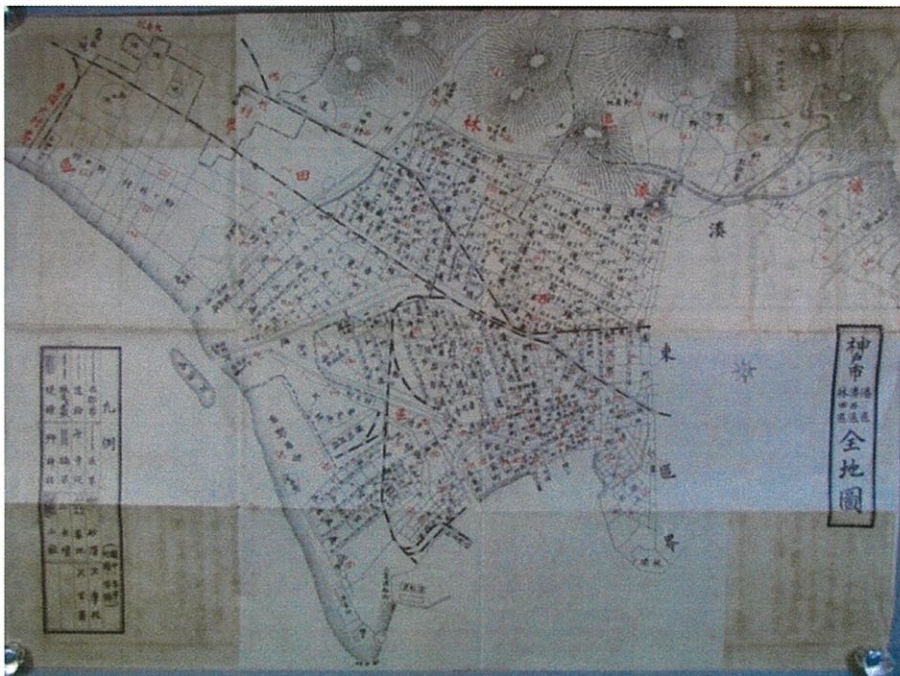


鳥瞰図に描いた永福寺の様子。境内レイアウトや本堂は上記の資料を参考にして再現しました。

●江戸時代末期における兵庫津の市街地景観を理解するために有用な参考資料の収集

兵庫津鳥瞰図 1868（仮称）制作にあたり、多方面からの資料を元に幕末明治維新期の兵庫津の姿に迫っていきました。

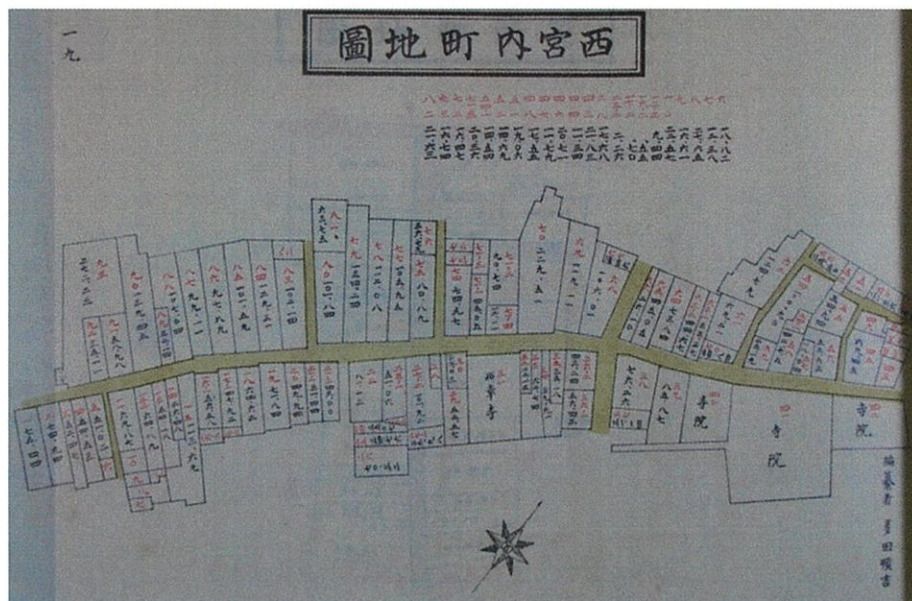
1. 神戸地籍図（湊区・湊西区・林田区）坤 1910年（明治43年）



当資料は、兵庫県より提供していただきました。町ごとの地籍図が収録されています。時

代としては明治後期発行になり、明治初期の街区割の直接の参考にはなり難い点がありましたが、神戸大空襲で罹災する前の兵庫津地域の地籍が記されているということと、明治初期から明治後期までに想像される土地改変を考慮することで、兵庫津地域の明治初期の姿に迫ることの出来る有益な資料となると思われました。明治期の土地改変で意識をした点は兵庫運河の開削で失われた土地、幹線道路の拡幅で変化した土地、こういった点を作者の想像を交えて、改変前の街区割を想像して再現しています。

実際の鳥瞰図制作の中で当資料を活用した点は、町ごとの地籍図をパソコン上で切り抜き、ジグソーパズルと同じように、組み合わせて繋いでいくことで、兵庫津地域の明治後期の巨大な地籍図ができて参ります。掲載されているそれぞれの町は、現代の地図のように北が上方とはなっておらず、縮尺も町ごとに違っていること、パソコン上で尺度を合わせていくこと、方角を見定めていくことを繰り返して、組み合わせて行きました。



例・西宮内町地籍

現代のように正確な測量の元に作られた地籍図では無いため、それぞれの町ごとに上手く合致しない点も多々ありました。

2. 兵庫神戸実測図 1881年（明治14年）



当資料は、神戸市立博物館がインターネット上で公開しています。この資料を活用した点は、1.の「神戸地籍図（湊区・湊西区・林田区）坤」の町ごとのデータを並べて繋ぎ合わせていく際のベースとしました。1.の地籍図は正確な測量がなされていないことから、ジグソーパズル状に組み合わせていく際に繋がらないことが多く、近代的な測量で作成された正確な地図ということで、一定の解決を導き出すために当資料を活用しました。

3. 兵庫津遺跡第62次発掘調査報告書付図・兵庫城平面図 2017年（平成29年）



当資料は、神戸市教育委員会文化財課が発行したもので、巻末の付録の兵庫城平面図です。図の中で左上側が斜めに切り取られている箇所がありますが、兵庫運河で破壊された遺跡の部分になります。この資料を活用した点は、兵庫津地域の中で正確な兵庫勤番所の位置を導き出すために利用しました。図中の右側から下側にかけて伸びる外堀と、一部内堀の正確な位置が分かります。

4. 兵庫津遺跡第 62 次発掘調査報告書付図・尼崎藩兵庫陣屋図 2017 年（平成 29 年）

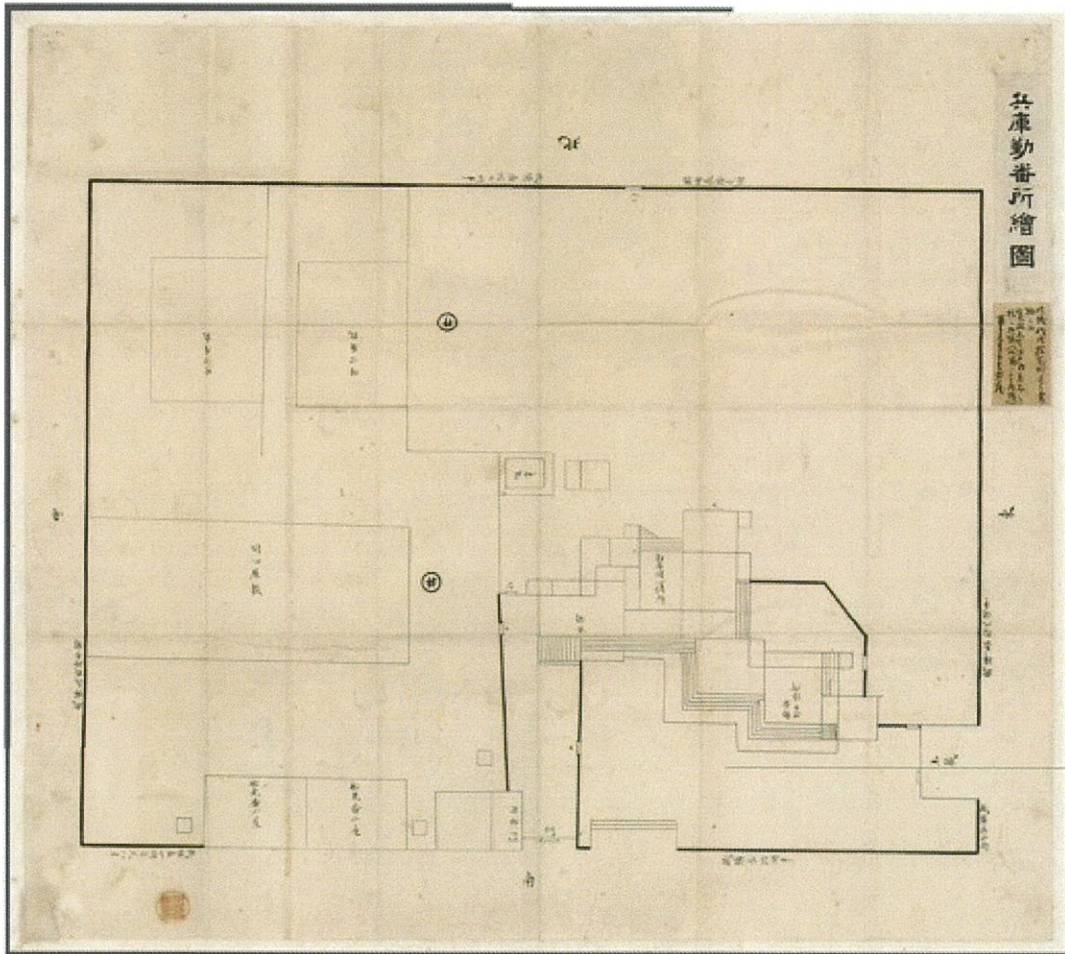


付図3 尼崎藩兵庫陣屋図(中判)

当資料も 4.と同じく神戸市教育委員会文化財課が発行したもので、尼崎藩時代（1769 年

以前)の兵庫陣屋のレイアウト図になります。図には四方に外堀、一部内堀が記載されていること、陣屋の建築物が分かります。この建築群の一部が徳川幕府の兵庫勤番所に活用されて行きました。4.資料の外堀、内堀の位置が、この兵庫陣屋図の堀の位置と合致して行きます。

5. 兵庫勤番所絵図



当資料は、神戸市立中央図書館貴重資料デジタルアーカイブズで公開されている兵庫城勤番所絵図で、昨年オープンした兵庫県立兵庫津ミュージアム・初代兵庫県庁館のベースになった平面図です。3.4.5.それぞれの資料を重ね合わせて行くことで、兵庫運河開削で失われた兵庫勤番所の位置が導き出されて行きました。

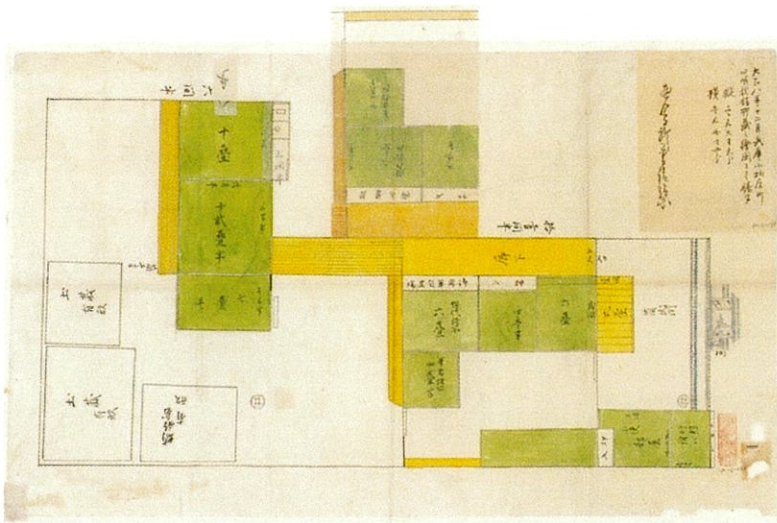
6. 兵庫津絵図 1869年(明治2年)



当資料は、神戸新聞社常務取締役 大国正美さまより画像の提供をいただきました。

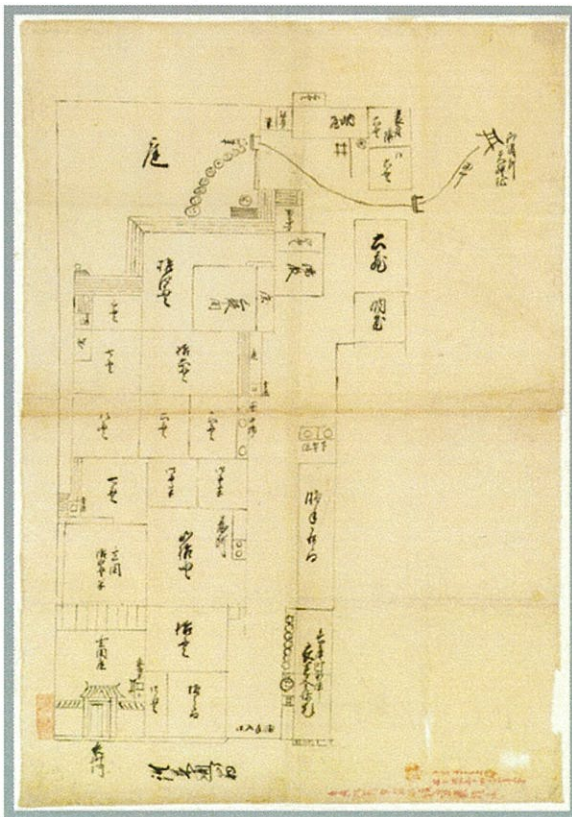
他にも元禄期、嘉永 3 年、文久期と時代ごとの兵庫津の絵地図などの画像資料をいただきました。それぞれの資料を活用した点は、寺院の名称、配置を参考にしています。

7. 岡方惣会所普請絵図



当資料は、神戸市立中央図書館貴重資料デジタルアーカイブズで公開されている岡方惣会所普請絵図です。この資料を元に、該当する土地に建物の立ち上げ作業を行いました。

8. 兵庫本陣間取図



当資料は、神戸市立中央図書館記帳資料デジタルアーカイブズで公開されている兵庫本陣間取図です。神明町に衣笠屋又兵衛の本陣建築。この資料を元に、該当する土地に建物の立ち上げ作業を行いました。

9. 浜本陣の研究 1956年（昭和31年）



当資料は、神戸市立中央図書館で閲覧したものです。兵庫津の南浜地域にあった浜本陣地区。江戸期に9軒の浜本陣があり、和田岬方面にあった網屋惣兵衛を除き他の浜本陣は中之島町と出在家町に集中していました。鳥瞰図を描く際に、該当する土地に浜本陣と比定する屋敷を描いております。

●北風正造、三木谷治兵衛、江戸時代における著名人の邸宅等の位置の特定

兵庫津の鳥瞰図を描画するにあたり、インターネット上で有益な資料を探していく過程で、郷土史家・前田章賀氏が平成24年4月に著された「明治時代初期 兵庫津三十八ヶ町 土地台帳名簿録」の存在を知ることとなり、神戸市立中央図書館に蔵書されていることを確認し閲覧しました。

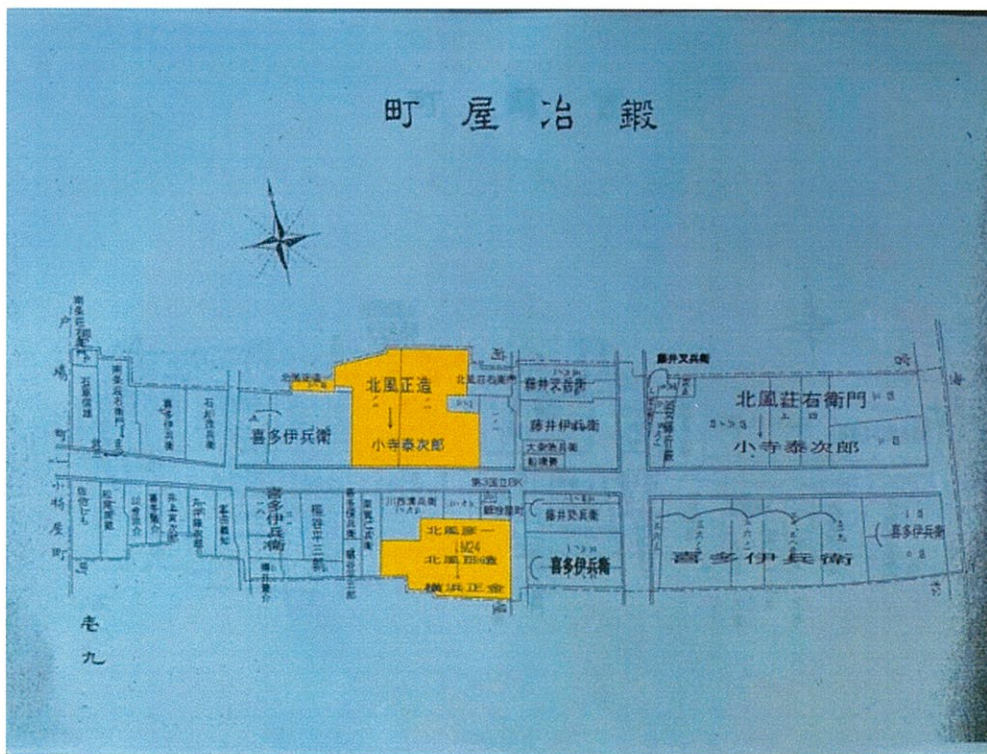
町ごとの地籍図、土地の所有者が記載されたこの資料の作成に当たっては、法務局に保存されている土地ごとの地籍を調査するという、地道で膨大な作業の繰り返しだったことが想像されます。

地籍ごとに同じ人名が記載されていることも多く、実際に生活をしていた土地がどちらになるのか、また他人に貸していた土地なのか定かではありませんが、前田章賀氏の著作によって明治初中期の兵庫津の地域において、著名人がどの土地を所有していたのかに迫ることができました。

以下に代表的な著名人の所有される土地や、兵庫津鳥瞰図での同土地を紹介してまいります。

1. 北風正造邸・鍛冶屋町

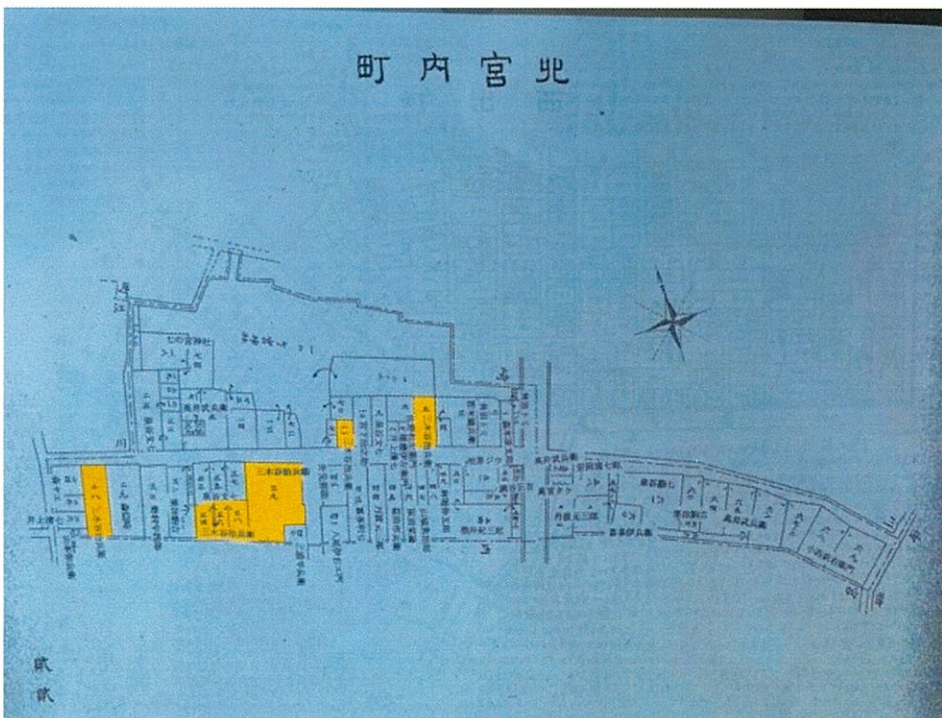
兵庫津を代表する豪商、北風正造の土地。他にも近隣には北風荘右衛門、喜多姓の土地など北風一門の名前が目立ちます。





2. 三木谷治兵衛邸・北宮内町

楽天グループ株式会社・代表取締役会長兼社長 三木谷浩史氏の先祖、三木谷治兵衛の土地です。兵庫津で米問屋を営んでいました。





3. 垂井弥右衛門・小物屋町

兵庫津の名家、正直屋・垂井家の土地です。

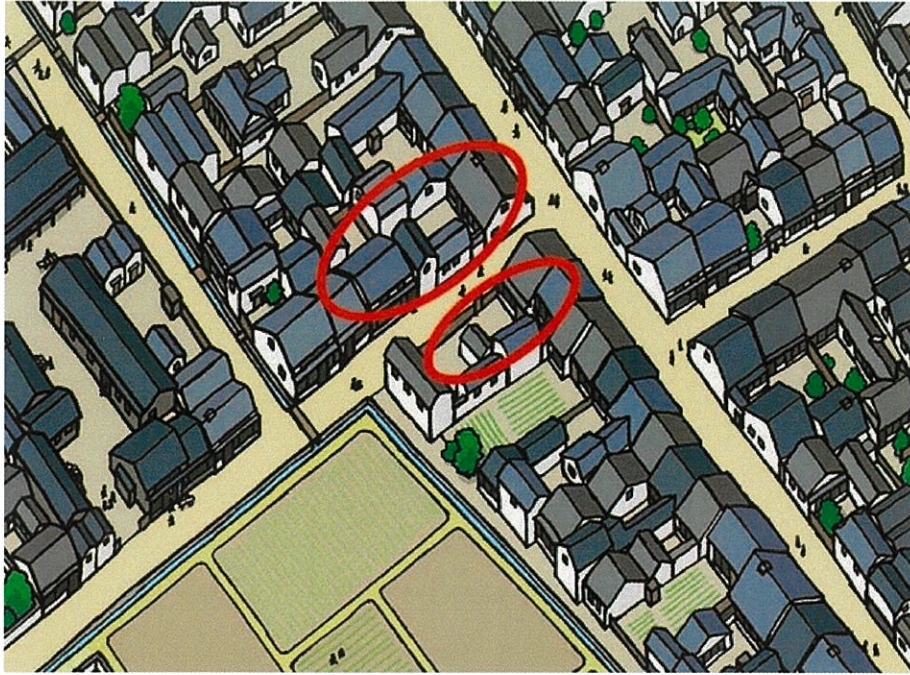




4. 高田五兵衛・切戸町

樽屋五兵衛 (<https://www.kobe-tarugo.com>) の前身となる商家です。





●おわりに

兵庫津鳥瞰図 1868（仮称）では、40 数点の資料から幕末明治維新期の姿を導き出しています。約 1 年掛かりの制作作業では、着手前に岡山市の東山墓地にある瀧善三郎氏の墓参もしました。

どこまで兵庫津の姿に迫ることができるのか、大きなチャレンジだったと思います。郷土史の研究は、これまでがそうであったように、今後も新たな発見が日夜出てくることでしょう。

2022 年 11 月に兵庫県立兵庫津ミュージアム・ひょうごはじまり館でデビューする兵庫津鳥瞰図 1868（仮称）が、新たな発見のきっかけになり、より真実の兵庫津の姿に迫ることができることを期待しております。